せとる　くおーたりー
C. E. T. L. Quarterly
教育・学習活動支援センター広報　No.21　発行日 18. Nov. 2005

巻頭言　文学部の改組について―背景と概要―

文学部長　石神　豊

2007年度より文学部が改組転換され、新しい体制になる予定です。この改組の背景と目的および概要について述べてみたいと思います。

少子化によって、今後、大学間競争が熾烈になっていくということは、早くから指摘されていたことですが、本年の入試をとってみても、入学者が定員に満たなかった私立4年制大学が160校に上り、なかには定員の5割も満たなかった学校が17校あったと報じられました（7月25日読売）。多くの大学では、こうした危機を早く感じ取り、すでにさまざまな大学改革に取り組んできています。

各大学の文学部についての改組をみたとき、制度面で特徴的なことは、「多学科制」から「1学科制」への移行が多いということです。いわゆる大手の大学をみても、慶応大学文学部は5学科から1学科に、早稲田大学第一文学部は3学科から1学科に、関西大学文学部は8学科を1学科に……という具合です。従来の多学科制度では、カリキュラム面・人事面で、時代の動きや学生のニーズに対応できる柔軟性を欠き、他方、学際化・多様化した学問の構築がしにくいという背景があります。私たちが調査に行った大学の担当者も、「学科単位では新分野の学問を置けない」と言っていました。

したがって、改組の大きな目的の一つは柔軟な教学運営にあり、そのための制度として専修制度の導入ということになります（大学設置基準の大綱化によって可能となりました）。これは、従来の学科・専攻の枠組みを取り払い、1学科のもとに「専修」として設定しなおすことで、柔軟な教学の運営をはかろうとするものです。専修制度は、学内・学部内の意思決定を直ちに反映することが可能です。

そこで私たち文学部も、先行した他大学の例を参考にしつつ、しかも本学らしい改組改編のあり方を考えてきました。私たちは、改組の目的を「学生のため」という一点におきました。教員は「学問のため」という文言を使いたがる面がありますが、これはときに保守的性格を帯びてしまいます。少なくとも大学では、学問は学生のためにあるというべきでしょう。

問題は、この「学生第一」という理念を、どう制度的に保証するかということです。一つは、

上述の専修制度をいかに学生本位のものとするかです。これと連動して、専修のカリキュラムおよびその基礎ともいうべき、学部設置の科目をどうするかということが次の課題です。人間教育、大文化建設、世界平和という、本学の建学精神をどう具体化していくか、そのための基礎力は何かに焦点をあてる必要があります。そしてもっとも重要なことは、在学生とともに本学の発展を考え、実現していく体制作りです。今回の改組には、こうした課題が課せられているといえます。

さて、予定されている文学部改組の内容（概要）について述べてみます。

新学部名は「人間学部」となる予定です。入学試験は学部一括で行い、１年次は全員が同じ学部生として学びます。１年次は、とくに基礎力（読・考・書および語学力）養成と学習へのモチベーションを高めることが眼目となります。１年次の学部共通科目には次のような科目があります。①少人数の基礎ゼミ、②学部・専修案内の科目、③専修入門的科目、④学部外国語科目（英語、中国語、ロシア語）、⑤学部総合科目。この⑤の科目は、学生側からの提案を生かす科目として、「（仮称）講座人間学」と銘打って数科目開設する予定です。

２年次から各専修へと所属するのですが、専修としては、「英語・英米文学」「社会学」「人文学」「日本語・日本文学」「中国語・中国社会文化」「ロシア語・ロシア社会文化」「総合人間学」の７専修を予定しています。「総合人間学専修」は、７専修すべての科目から自由に選択履修するというものです。そして各専修の最大受入数は決めますが、これは毎年検討することとなっています。希望の多い専修は、できるだけ要望に添えるよう努力していき、また今後、新しい専修の設置も考えていきます。

さて、改組カリキュラムの特徴は、①副専攻制度と②プログラム履修にあります。副専攻制度とは、主専攻に対して、一定の単位数を他専修科目から履修すれば「副専攻」として認定されるというものです。たとえば、主専攻が「社会学」、副専攻が「中国語・中国社会文化」というようになります。そのために、専修専門科目の卒業所要単位数が比較的少なめになっています。つぎにプログラム履修ですが、これは（現在のところ）実務的・特殊技能的なものを中心に、専修を超えて自由に履修できるようにする予定です。「翻訳・通訳家養成プログラム」「日本語教育プログラム」「古典語プログラム」など10以上の多彩なプログラムを考えています。

また、その他、中高教員免許状も、これまでは各学科で１種類しか取得できなかったのですが、改組によって、どの専修に属していても５種類の免許状が取得可能となり、複数の免許状が取得できるようになる予定です。これも大きなメリットだといえます。

改革は、本来の目的に照らして、たえず検証していく必要があります。その意味では、今回の改革は一回かぎりで終わる性格のものではなく、今後継続すべき改革の第１歩にすぎないともいえます。これからは、積極的に授業改善に取り組むとともに、よりよき学部建設に向けて対話をすすめていきたい。教職学一体となって創価大学の発展、建学の精神の実現をめざしていきたいと思っています。

夏の授業研修会・サンフランシスコ・シティ・カレッジ視察の報告

CETLでは、毎年夏に授業改善の研修会への派遣支援をしてきました。本年度は、フロリダで開催された「スペンサー・ケーガン協同学習研修会」に教育学部の桑原ビクター先生が参加され、また私大連の研修会（日本私立大学連盟）には、同じく教育学部の董芳勝先生が「授業スキルワークショップ」に参加されました。

さらに本学の教育・学習支援体制の向上を目的として、CETLでは海外の大学の先駆的な試みを視察してきましたが、本年度はサンフランシスコ・シティ・カレッジに視察団を派遣し、有益な示唆を得ることができました。

桑原先生と董先生には研修会の感想を、清水先生には視察の報告をいただいております。

スペンサー・ケーガン協同学習研修会に参加して

教育学部　桑原　Victor

7月18日から22日の間、教育・学習活動支援センター（CETL）から派遣支援を受けて、アメリカ合衆国のフロリダで開催された「スペンサー・ケーガン協同学習研修会」に参加する機会を得た。この研修会には、海外8ヶ国以上から200人を超える参加者が集まった。この研修会の参加は私にとって大きな触発となった。以下、私が研修会で学んだことの要点を報告させていただく。

今回の「スペンサー・ケーガン協同学習研修会」の中心テーマは、効果的な教育のための様々な「ストラクチャー」の紹介であった。この「ストラクチャー」とは、協同学習を促進するために用いられる方法または仕組みのことをいう。協同学習とは何か。以下の教員の授業の進め方の例を通して説明したい。おおざっぱに言って、授業の進め方から教員を大きく3種類に分類することができる（A、B、C型）。まず初めのA型の教員の授業では、主に講義をする。そして学生に質問をする時には、一人の学生を指す。このA型の教員が行う教育・学習方法は、勝者と敗者を生み出し、学生間の競争関係をつくりだす傾向がある。次にB型の教員の授業の進め方は、A型の教員の場合と大体同じである。しかし、明確な違いは、B型の教員は学生をグループに分け、質問時に、一人の学生に対してではなく、グループに対して質問をする。しかしこのB型も、グループ内での競争関係、学生の貢献度の不均衡が生じやすい。それに対してC型の教員の場合、授業で協同学習方法を用いる。それは、教員が質問を投げかけ、それに対しグループ内の各学生に発言する機会と教員との対話の機会をつくりだすものである。この協同学習方法は、学生間の相互依存性、責任の共有、平等な参加を重視している点で、一般的なグループ学習方法とは異なる。

それでは、実際どのように教員はこの協同学習方法を実施していくのか。その答えとしてケーガン博士は、多様な「ストラクチャー」の利用を推奨する。機能または目的によって分類さ

れている「ストラクチャー」の利用は、授業で協同学習を進めていく上で効果的である。「ストラクチャー」は、目的に合った特定のものを用いる。授業内容を、使用する「ストラクチャー」の型にあてはめて、協同学習の環境をつくりだす、という考え方である。今回のケーガン研修会では、27種類の「ストラクチャー」が紹介された。それぞれ、授業雰囲気、チーム関係、授業内容理解、考える力、コミュニケーション能力、または情報共有などを向上させる目的をもっている。

研修を通して、この協同学習方法は、従来の一方的な講義形式やグループ討論と比べて、たいへんに優れた点をもっていると感じた。今回の報告は、文字数の制限もあり、簡単な紹介で終える。将来、今回研修会で学んだ協同学習方法の実践報告を行いたいと考えている。最後に、CETLに対し、この有意義な研修会に参加する機会を与えていただいたことに感謝の言葉を述べたい。

「授業スキルワークショップ」参加の感想

教育学部　董　芳勝

この度、８月３日～５日の３日間にわたり、日本私立大学連盟（通称「私大連」）が浜松市で主催した「平成17年度 大学の教育・授業を考えるワークショップ」に参加させていただきました。ここで参加した感想を交えながら、ワークショップの様子を簡単に報告します。

当ワークショップは、ＡコースとＢコースに分けられており、私が参加したのはＢコースでした。Ａコースは、経験年数を問わず、現在抱える課題に対して、相互に積み上げてきた経験をもとに、グループ討議を中心にして、改善・解決の具体策の探究を目的としていたのに対して、Ｂコースは、若手教員または大学での教職経験年数４年未満の教員を対象に、私立大学の特性や大学環境の変化の実際を知ると共に、学生理解のためのプログラムや授業の実際を相互に点検・評価するプログラムによって教育力の向上を目指し、セッションや授業スキルワークショップ等の研修活動がありました。

まず、このような勉強のチャンスをくださった「教育・学習活動支援センター」の方々に感謝します。お陰で今回、日本の高等教育に触れることができました。今年で来日10年目の私は、今までずっと日本の初等教育、特に小・中学校の学校教育にかかわらせていただいてきました。小・中学校の教師研修は、中国と同じで毎年、夏休みを中心として行われています。それでは、大学の先生方の研修とは一体どのような方法で、どのような内容が行われているかということにはじめは大変興味を覚えました。参加してみると、充実した研修内容のお陰で、大変考えさせられ、とても勉強になりました。以下、参加した感想を簡単にまとめてみました。

１つは、大学の教員の研修は、正に生涯教育の原理にあたるのではないかと感じました。これは、研修のコースの設定に現れています。前に紹介したように、私たちのＢコースは、大学での教職経験年数を基準に設置したものですが、

Aコースは、教職経験年数に関係なく、共通の関心ある課題に対しての研修討議を行いました。さらに、A・Bコースで共通した討議や勉強の研修活動もありました。例えば、基調講演や事例発表は、その一例でした。このように、先生方は、それぞれ自分の専門や仕事に磨きをかけて、絶えず進歩を求めていきます。これは、正に人間は死ぬまで勉強しつづける生涯教育の原理にあたると考えています。

2つ目は、大学の教育・授業を考える社会的なコミュニティーの構成です。つまり、これからの社会における大学の役割を考える同志が共に学び、互いに交流していくのです。無論、これらの同志は、それぞれの専門分野も、在職している大学の機関も異なっています。しかし、これからの大学の在り方や大学における自分の役割・使命、ひいては教育の在り方といったものに対しての志は、皆に共通しています。例えば、私たちのBコースの授業スキルワークショップでは、それぞれの異なった専門分野でのミニ模擬授業を行いました。メンバーたちは、授業での立ち方、声の出し方、歩き方、学生役の人たちへの視線の送り方等々、教師としての技能を、互いに批評したり、アドバイスしたり、授業の講評をし合っていました。そこではもちろん、緊張感と共にメンバーのそれぞれの優れた教師、優れた授業をイメージする力とそれらの再現力が要求されますが、メンバー同士は、互いに触発と励まし合う中で、授業のスキルを身につけると同時に、大学の授業をつくり、大学の教育・授業を考える喜びを味わうことができました。つまり、ワークショップに参加した私たちは、それぞれの智恵を出し合い、大学の教育・授業を考える社会的なコミュニティーが構成されたわけです。これは、まさしく仏法で言う「桜梅桃李」の原理のように、桜、梅、桃、李のそれぞれの美しい花を咲かせています。それらがあって、はじめて美しい自然があります。これは、子どもの個性を重視し、発揮させる基礎教育の初等教育のみならず、高等教育ひいては教育全体においてもそうでなければならないと考えるものであります。

3つ目は、我が創価大学の素晴らしさを一層感じました。これは、今回での研究活動の中で、たくさんの他大学の先生方との交流の中から感じたもので、これからの大学が生き残っていくためには、全教職員と学生がどのような一体感をもつかによって決められるということです。これは、A・Bコース共通の基調講演（学校法人立命館理事長・川本八郎氏）や事例発表（関西国際大学長・濱名篤氏と名古屋大学高等教育研究センター助教授・近田政博氏）、またはBコースのセッション等、いずれの研修活動においても、多くの先生方の中で共通していました。さらに、大半の他大学は、未だにその模索期間にあることが伺えました。それらに対して、我が創価大学においては、既にこれを実現しており、建学の精神としてかかげています。これは、「学生第一」の建学精神から現れた教職員と学生との一体感です。つまり、主体者は、学生であって、教職員は、その学生のために全て奉仕し、学生の引き立て役を担っています。そうすることによって、はじめて教職員と学生との一体感が実現できて、教職員の主体性も現れ、大学の発展につながっていきます。そのため、教職員は、常に自己を向上し、学生と一体となって、

大学の教育・授業を考えていかなければなりません。そういう意味で、我が大学の教育・学習活動支援センターの存在は、極めて大きな役割を担っており、現在、既に日々の授業や学習活動の中に展開をしています。今回、このようなチャンスをいただけたのも、これもひとえに大学の教育・学習活動支援センターの先生方のお陰です。これからも、建学の精神を心に刻み、その精神をより一層実現していけるよう決意を深めております。

以上、自分なりの感想ではありますが、「大学の教育・授業を考えるワークショップ」のような研修機会は、大変有意義なもので、機会があればまた是非参加したいと思いました。

アメリカ海外視察に参加して

文学部　清水　強志

過日、海外における高等教育機関の最新の教育・学習支援事情を調査するため、CETLの坂本辰朗センター長、関田一彦副センター長、小林孝次経済学部教授、企画課の澤登秀雄さんと共に、アメリカ視察に参加させて頂いた。

カリフォルニアでは、大学進学は3層構造になっており、カリフォルニア大学システム（10校）にはハイスクール上位約12.5%（うち、もっとも難関とされるカリフォルニア大学バークレイ校には上位5％以内と言われる）の学生が、カリフォルニア州立大学システム（21校）には上位約33.3%が進学している。そして残りの学生はカリフォルニア・コミュニティ・カレッジ・システム（108校）に無試験で入学が決まるという現状である。

今回訪問したサンフランシスコ・シティ・カレッジはこのコミュニティ・カレッジ・システムの中でも最大のカレッジ（学生数106,480人）であり、全米でもその大きさは第2位である。同カレッジは2年制の短期大学ではあるが、卒業後に4年制大学への編入が可能であり、卒業生の中にはカリフォルニア大学システムへ編入している学生もいる。これらの現状をふまえ、大規模かつ学生の学力の幅が大きいこのカレッジにおける「学習支援」について調査することは今回の最も重要な目的の一つであった。

サンフランシスコ・シティ・カレッジ

具体的な活動内容を紹介すると、同カレッジでの「学生支援」はシステマティックなチュータリング制度を中心に行われている。支援の主軸となるThe Learning Assistance Centerは、創価大学学生ホールのワン・フロアーに匹敵する大規模なものであり、そこをいくつかに区切って、

リーディング、ライティング、数学、外国語のチュータリングがなされている。今回、2日間かけてセンター長であるNadine Rosenthal教授、また各チューターを担当している先生方（時にはチューターをしている学生）にヒアリングを行い、さらに関連施設としてMath Arithmetic LabおよびEnglish Computer Labを訪問させて頂いた。

Math Arithmetic Lab

同カレッジに関し特筆すべきことは、チューターの中心が学生自身ということであり、また半期チューターを行うことで1単位認定されるというシステムである。ただしこれは単にチューターを行えば良いというものではなく、18時間のトレーニング（LEARN10 Introduction to Tutoring and Mentoring）を受けた上で、実際に25時間のチュータリングを行い、はじめて単位が認定されるというシステムになっている。その上でスーパーバイザーがチューターを行う学生を厳しく評価しており、まれにやめさせられる学生もいるという徹底したものであった。まさにサービスを受ける学生を「支援する」という意識の高さが伺われた。

The Learning Assistance Centerにて

今回の視察は、学生に対するサービスの「質」を考えるという意味でも私自身にとって大変学ぶことが多く、意義深い経験であった。この度の見聞をふまえ、今後とも教育研究を深めていきたい。

ジャンザバー研究会　第四回講演会を開催

ジャンザバー（Jenzabar）とは、教員と学生の双方向性のあるコミュニケーションを実現するためのWeb講義支援システムのこと。すでに本学をはじめ東京農工大など多くの大学に導入されています。

その研究会の第４回講演会が９月２日（金）CETLとの共催で本学本部棟にて開催されました。本学からは、坂本センター長が歓迎の挨拶を述べ、また田中充先生は「PC教室におけるWebベースのスライド教材を活用した授業支援システムの開発と実践」とのテーマで事例紹介をされました。

田中先生より講演会の報告・感想をいただきました。

ジャンザバー研究会の講演会に参加して

共通科目非常勤講師　田中 充

去る2005年９月２日、ジャンザバー研究会の第４回講演会「ブロードバンド時代の教育方法・講義支援を考える」が、教育・学習活動支援センターとの共催で本学にて開催され、産学を中心とする関係者が約80名参加した。

ジャンザバー研究会は、高等教育における教育の質の改善とITを活用したシステムの普及を目的として設立された研究会である。今回は、講義支援システムの発展的活用に関連して、「海外の大学における教育の情報化の現状」（東京大学 山内祐介助教授）、「e-learningコンテンツと著作権」（コンピュータソフトウェア著作権協会 太田輝仁氏）の二つの基調講演、展示による製品紹介、ならびに「専門学校での活用事例」（河合塾学園コンピュータ日本学院専門学校新大阪校 宮繁純一氏）、「専門職大学院（MOT）における社会人学生のためのオンデマンド授業配信」（東京農工大学 亀山秀雄教授）、「Webベースのスライド教材を活用した授業支援システム」（筆者）の事例紹介などが行われた。

国内の大学では何らかのe-Learningに関係するシステムを導入することが当然のようになりつつあるが、現状としては、そのe-Learningの器を用意するだけで精一杯になり、それを活用しきれていないケースが多く見受けられる。e-Learningを導入する目的は、効果的な教育・学習を支援することである。その目的を達成するためには、器だけでなく中身（コンテンツや教育・学習方法）をどう洗練させていくかが現在の大きな課題と言えよう。そのような意味において、システムを提供する側とそれを活用する側の双方が参加した今回の講演会は、筆者が当初予想していた以上に有益な場であった。

全体の中では特に、山内助教授の基調講演の中で海外の先進事例から学べることとして、「全学的な組織の必要性」「財政的な裏づけ」「プロジェクトベースの展開」「教育効果の評価と改善」を挙げられていたことが印象に残った。

さて、「経験より出発せよ」とは創価教育学体系の基本テーゼのひとつである。これは実証的

な教育研究の重要性を意味するものであり、創価教育学体系の中では、具体的に「教育実践上の成功事例を分析、考察すること」、「教員による成功例の観察とその過程の分析」の必要性について言及されている。e-Learningを現場で利用している教育者の事例紹介を行うジャンザバー研究会は、この考えに通ずる場であると言えよう。

情報通信技術の進展が早いために、初期の導入段階ではe-Learningを活用した教育方法が、総合的に従来以上の効果を発揮するレベルに達することは難しいかもしれない。しかし、従来に実現できなかった新しい方法で、より効果的に教育・学習を支援できる大きな可能性を秘めている。この技術をうまく活用するためにも、より多くの教員が単に経験するだけでなく、その経験を記録・共有し、有効な方法について議論する機会を持つことが重要であり、その場として、ジャンザバー研究会や教育・学習支援センターが更に発展していくことを期待したい。

ジャンザバー研究会ホームページ：
(http://www.maruzen.co.jp/home/irn/jenzabar/)

本年度第一回の教育サロンを開催

7月8日（金）に本年度第一回の教育サロンが開催されました。

坂本センター長が担当する「初等教育原理Ⅰ」の講義を見学した感想や主体的な授業参加を促す講義方法ならびに学生の学習態度の改善策などについて、活発な議論が展開されました。

後期も先生方の多くが授業を公開されていますが、CETLはこの授業公開の機会を活用して、授業改善の議論の場を提供していきます。

今回のサロンに参加された工学部の篠宮紀彦先生から感想をいただいております。

授業見学会に参加して

工学部　篠宮　紀彦

私は今年4月に新任教員として企業の研究所から赴任してきました。前期は実験と少人数の演習のみ担当ですが、後期から「情報システムモデリング」という講義を担当します。今回、坂本先生の公開授業に参加させていただき模範的な授業法を学ぶことができました。

まず、本見学会の紹介時に、この授業では非常に予習量が多く学生にとって負担が重いことや、授業雰囲気も厳しいと聞かされていましたので、私も緊張感を持って参加しました。しかし、実際は教員と学生とのやり取りが多く、アットホームな雰囲気に包まれていました。そして、和やかさの反作用として生じる私語の問題も学生がお互いに注意し合うことで授業の秩序を保っていました。

次に気になる予習課題についてですが、坂本先生は事前にグループワークで次回授業内容に関するレポートを作成することを義務づけており、このレポート発表を中心に授業が進められています。つまり、このレポートによって学生

は主体的に授業へ参加できており、教員は学生の理解度を確認することができます。特に試験前にはレポート作成に対するお互いの貢献度をグループ内で評価し合う制度を取り入れており、教員の目の届かない客観的な授業態度を確認することができるため、非常に効果的であると思いました。

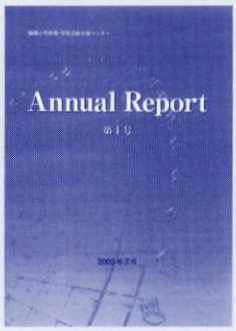
今後、私が情報システム工学科の専門科目を開始するにあたり、学生の専門分野、進路の方向性、雰囲気の違いを考慮して、どこまで坂本先生の授業法を取り入れられるかを真剣に検討してゆきます。また、今後もCETLの企画へ積極的に参加させていただき、学生にとって最適な授業のあり方について探求し続けたいと思います。

Information

・後期に授業公開をされている先生方の講義名ならびに時間帯などの詳細については、CETLのホーム・ページをご覧下さい（http://www.succ.soka.ac.jp/CETL/）。

・9月26日（月）に、聖学院大学の国府田秀行先生、佐藤逸子先生がCETLの見学に来られました。聖学院大学では今年度からラーニングセンター（学習支援を目的としたセンター）が開設されています。センター運営や学習支援体制などについて、有意義な意見交換をすることができました。

・FDの諸活動の記録や高等教育研究の成果を提供する場として、CETLではAnnual Reportを発刊しております。今春3月刊の第1号を多くの先生方にご覧頂くため、各共同研究室に置くことになりました。ご活用願えれば幸いです。



・春休みに海外視察を実施します。参加希望を含め詳細についてはCETLまでご連絡ください。

編集後記

大規模な学部再編成時代における、本学の文学部改組が学生のため・人類のためという理念をどのように具現化してゆくか、その過程がとても楽しみに思えた。(S)

C. E. T. L. Quarterly No. 21

編集・発行
創価大学　教育・学習活動支援センター
〒192-8577　八王子市丹木町1-236
Tel：0426（91）9782　内線 2146
E-mail：cetl@soka.ac.jp